

新たな「ミューズ」としてのマリー・ローランサン

—アンリ・ルソーの《詩人に靈感を与えるミューズ》と比較して

山田茉委 (早稲田大学)

マリー・ローランサン (Marie Laurencin, 1883-1956) は、20世紀前半に主にパリで活躍した画家である。ローランサンは、詩人・批評家のギョーム・アポリネールとの恋愛関係でも知られ、一般にはローランサンをアポリネールのミューズとして捉える傾向が強いが、これはアンリ・ルソー (Henri Rousseau, 1844-1910) の《詩人に靈感を与えるミューズ (第2ヴァージョン)》(1909)における彼女のミューズとしての表象が由来とされる。

先行研究においては特にフェミニズム的観点から、ローランサンは男性にとってのミューズではなく一人の立派な画家である、という主張がなされてきた。これに対し発表者は、ローランサンが幼少期から女性的なものへ憧れていた事に着目し、彼女は自身を男性的視点によるものではない独自の「ミューズ」として捉えていたと考え、そのイメージを指摘する。

本発表ではまず、アンリ・ルソーが描いたミューズとしてのローランサンの肖像画と、ローランサン自身が描いた肖像画を比較する。ルソーの作品では、神話のミューズに扮したローランサンと詩人アポリネールの姿が古典的主題に即して描かれ、インスピレーションを与える女性としての面が強調される。しかしローランサン作《アポリネールとその友人たち (第1ヴァージョン)》(1908)では、パブロ・ピカソの恋人であるフェルナンド・オリヴィエが無邪気に微笑む女性として描かれる一方、ローランサンは一輪の花を手に凛とした表情で詩人に寄り添っている。また《アポリネールとその友人たち (第2ヴァージョン)》(1909)では自身を最前に配し、目を引く青色の服を纏う姿によってその存在が強調される。画面左部に女性達を集めローランサンと距離を置いて描く構図からも、この集団の中で彼女は自身を画家の一人に据えていると解釈できる。

同時に、ローランサンが画家である自身の姿に「女性らしさ」を描き込んでいる点に注目する。ローランサンが作品において女性性を主張する理由について、婚外子として母子家庭で育ち、母に強い憧れを抱いていた画家の特別な生い立ちが指摘できる。男性の不在に動じない美しい母の姿は、ローランサンが憧れた娼婦達の姿にも重ねられ、「女性である事を謳歌する女性」というローランサンならではの「ミューズ」像を生み出したと考えられる。

ローランサンは作品の中で、他の女性達とは差別化しながらも、一般的なミューズとは異なる彼女自身が考える「ミューズ」として自分を描こうとしているのではないか。このようにローランサンの女性性の表れを作品から読み解く作業を通して、ルソーによる表象とは一線を画す、「画家でありミューズである」という新たなローランサンのイメージが指摘できると考えられる。